

「何におびえている、か」

学校に着いた淳は一昨日の夜に麗佳に言われたことを思い出す。

『貴方はそんなに、何におびえているのですか？』

そのセリフを口にした後、麗佳はすぐに「あ、こんなことを言っでごめんなさい」と謝ってきた。実感のわからないその言葉に許すも許さないもなく、ただその謝罪を「べ、別に気にしてないから大丈夫だよ」と受け入れるしか淳にはなく、ただ一方で心のどこか片隅がずきりと痛むのを感じていた。

「僕は、何かに恐れているんだろうか？」

そんな実感はやはりない。しかし、他者から見てそんな実感を感じさせるような振る舞いを淳はしていたのだろう。

いったい、一体何時からだろうか。「しまったな」と淳はそのことを聞いておく必要があったといまさらながらに悔やむ。

「ふう」

一息つき、淳は再考する。

何かを恐れるような事件は今までになかったわけではない。それは主に高校に入ってからのことだから、可能性は絞られてくる。

高校受験にあつた麗佳を助けたあのこと。

雄二が能力に目覚め、慎先生も能力者だと知つたあの出来事。

気高き純白、白藤聡介とのあの一件。

そして覚えていないけれども、あつたらしい誘拐事件。

可能性が高いのは白藤との戦いだろう。

「白藤さんは確かに強かった。だから恐れるに値するのだろう。」

でも。

でも僕はあの時、恐怖をそこまで感じてはいなかった。それ以上に、やってやるんだという気持ちのほうが強かったはずだ。

そうだ。

あのとき負けた悔しさを何度も思つて僕は修行してきたんだ。もうあんなことは絶対にいやだから。

そうだよ。

僕は何度もあのときを振り返ったはずだ。そしてそのときに恐怖を感じたことはなかったはず……」

淳は心の中で今まで何度も白藤との戦いを思い出したことを思い出す。そしてそのときに恐怖など感じていなかったことも。

だからこそこれは関係ない、と割り切りそうになる。しかし、一応、ということとで白藤との戦いを改めて反復すると、ゾクリと背筋を冷たく駆け抜ける風を感じたかのような恐怖に身震いした。

「なんで」

なぜ。

なぜ今まで一度も感じなかった様な恐怖をいまさら感じたのか。確かにこれを思い出すのは久しぶりだ。この戦いを振り返って復習したのは大体あの事件があつて一月のあいだだけだった。しかしその間に自身の悪かった点を復習しつくしたといってもいいくらいに、何度も何度も反復して思い返した。そのときには一度たりとも、ここまでの恐怖を感じ

たことはなかったはずなのに。

なのになぜ。

いまさらになつて……

じゃあやつぱり、白藤さんとの一件が原因なのか。

そこまで淳が考えたとき、勢いよく扉が開き、雄二が入ってきた。

「お、淳。おはよう」

「あ、雄二！」

雄二を見た瞬間、今まで考えていたことなんてすっかり忘れて、淳は一昨日のことを問い詰め始める。

「花火大会の日！ 何で君がいたんだよ！」

「あ、えーと、それはだな」

そうだ。

雄二はあの日、用事があつたはず。

それなのになぜ。

聞かれた瞬間に雄二は一步後退し目をそらす、淳は疑いのまなざしを向け続ける。

「雄二！」

淳は尚も雄二を問い詰めようとする。

「いや、だからな」

「だから何？」

雄二が目をそらすのも限界だと感じ、思わずポロリと本音を吐きそうになるのをぐっところえ、「いや、そんなことよ
りさあ」と話をそらそうとする。だが、一向に淳のにらみは
尚も続いた。

「おはよう、お二人さん。あ、淳君花火大会どうだった？」

そこへいつもは遅刻ぎりぎりのもなみが珍しくやってき
た。まだ朝の会が始まる15分前だからかなり珍しい。

雄二はもなみが淳に話しかけた隙にそそくさと自分の席
に逃げる。淳は「あ、雄二！」と当然これを追おうとするが、
しかしもなみが「まあまあ。それで、どうだったの？」と淳

をいかせてくれなかった。

結局もなみに花火大会で麗佳と過ごしたことの内容をこつてりと聞き出され、後から加わった咲と麗佳とともに朝の時間は過ぎた。

「なあ、お前ら」

夏休みがあけて、二人の修行を慎が見るのは週に二度となっていた。一人だけで修行してもいいほど成長してきているということもあるし、単に慎が学校のことと忙しくて手が回らないということもあった。だから慎が彼らの修行に付き合うのは月曜日と木曜日だけとなった。

「来月の二週目の日曜日ってあいてるか？」

そして今日は月曜日。約束どおり二人の修行に慎は付き合いが、なかなかどうして二人の修行はさまになっていた。一番危惧していた動体視力を鍛えるトレーニングも、二人が交互に技を出すほうと避けるほうに分かれ、技のスピードも慎ほどとはいえなくてもかなりの速さを誇り、故に反射係数は

かなり鍛えられそうだった。

これならもう安心だなと一人ごちた慎は、そういえばすっかり忘れていたと二人に聞いてきた。

「僕はあいてますけど……」

忘れていた慎からすれば、やっと聞いたという感覚のその質問だったが、しかし淳と雄二からしてみれば唐突に聞かれた要領のつかめない質問でしかなく、淳は思わず「一体なんでしょうか？」と聞き返す。

「ああ。実は俺の友達がその日結婚式を開くんだよ。んで、その友達がぜひともお前たちにあいたいって言って、ぜひともその結婚式に来てくれって言うんだ」

「はい？」

唐突で要領がつかめないそれは、しかして内容も突拍子もないようなことだった。だから思わず「いや、意味がわからないんですけど」と雄二は答え、「俺たちにどうして会いたいですか。いやそもそも、どうして慎先生の友達が俺たちを知ってるんですか？」と当前の質問を続けた。

「そいつの夫も能力者だからさ、お前たちのことはよく話し

てたんだ。だから会いたくなっていつも言ってたんだが、そいつ、ロシアにいてさ。なかなか機会がめぐってこなくって会えなかったんだ。でも、今回日本で結婚式を催すことになったんだ。だからちょうど良い機会だって事でさ」

「へえ、そうなんすか」

「ひよつとして、その夫になる方も慎先生とは仲がいいんですか？」

夫が能力者だと聞いて淳は思わず反応する。すると慎はうなずき、「ああ、そうだよ。高校のころ、俺や優希と一緒にいろいろやった仲さ」とほほを緩めた。

「へえ、そうなんすか」

「ああ。そもそも、その二人の馴れ初めも、能力が関係してんだ」

「え？ そうなんですか？」

「興味あるっすよ、それ。詳しく、詳しく！」

「まあまあ、それはおいおいな。ともかく今はトレーニングに集中しなさい。返答は明後日までにくれればいいさ」

「あ、俺別に大丈夫っすよ」

「僕も何も予定ないです」

二人があっさりと了承の返事をするので慎は肩透かしをくらった気分になり「あら。じゃあまあいいか」とこれで話を切り上げ、二人の修行の様子を見守った。

「あ、そういえば。楽しみにしてていいぞ、その結婚式」

修行が終わり、一息つく一人に慎は手をぱちんと合わせていった。淳は修行の疲れからハアハアと肩で息をしつつ、しかし慎の言ったことが気になり「楽しみってなんですか？」と聞き返す。雄二もその言葉に思わず「ひよつとして美女がっっぱい来るってことっすか!？」と反応した。そんな二人を見て慎はくすりと笑い、「美女はどうだろう。新郎新婦が美男美女だって事は言えるが、さすがにゲストまでは把握してないなあ」と肩をすくめる。

「だけどな。料理はたぶん期待しててもいいと思うぞ。なんてったって、開催場所は『クイーンズ・メリー……、何か号』。豪華客船だ！」

「豪華客船！！」

二人の驚き具合を楽しそうに見て慎は「ああ」とうなずくと、ぐっと握った拳を前に突き出し、「おいしいものもきつといっぱいあるに違いない」と目を輝かせた。豪華客船というフレーズを聞いた雄二もまた、「それならきつと、美女もいっぺいだろうなあ」と期待に胸を膨らます。しかし淳は「そんなところに僕がいつでも大丈夫でしょうか？」とうつぶいた。

「ん？ 何でいけないんだ？ 別に招待されてるんだから、いいに決まってるだろ」

「でも、場違いじゃあ……」

淳の態度に雄二は「ふっ」と笑い、「そんな事は関係ねえ！俺は美女を見に行くぜ！」と意気込む。慎は肩をすくめ、淳の肩をたたき「そんな事言ったら楽しめないぜ、人生」とニカリと笑った。

「そうですね。せっかく招待してくれたんだから、楽しみましょう」

淳は慎に向かって大きくうなずき、そして「おいしい料理、

かつこいいい船。楽しみだな」と期待に胸を震わせた。

「よし、じゃあこれから九月末に行われる体育祭の練習を始めるぞ！」

日付は変わって次の日の五間目。昼も食べおわり、元気いっぱいになったといわんばかりの姫川の声が校庭に響き渡る。そう、今月9月の終わりには体育祭が待っていた。

武蔵広大高校の体育祭では代々三つの種目が行われ、生徒はそのうちどれかの種目に参加するという形式をとっていた。そしてクラスごとに一つのチームとなり他のクラスと対抗戦を行い、各種目の合計得点の多かったクラスが優勝となる。

今年の種目は「サッカー」「ハンドボール」「ドッジボール」の三つだ。淳と雄二はそのうち、ハンドボールに参加をすることになっていた。

今まで生きてきた中でハンドボールは高校に入って始めて体育でやっただけで、だからこそ雄二は「あえて逆境に挑

むことで、モテ度がアップだぜ」と闘志を燃やし、一方の淳はサッカーは小中で体育でやってみてもものすごく不得意だと理解し、またドッチボールは腕力がそこまでないので強く投げれないと辞退した。しかし一方でバスケのドリブルだけは少し自身があり、だからこそハンドボールに参加すると決めたのだった。

「がんばってるわね、男子。 私たちも負けてられないわ」
なお、いろいろなことを考慮して女子と男子は違うチームとなり、男子は男子のチームと、女子は女子のチームとのみ戦うこととなっている。「ちえ。 女子と一緒にキャツキヤウフフってやりたかったぜ」と雄二がぼそりとつぶやいたのを聞いて、淳は「ああ、この判断は正解だったな」と心の中で思った。

「さあ、ハンドボールの練習を始めるぞ」

ハンドボールのチームリーダーとなった坂田がハンドボール組みに集合を促す。坂田は運動神経が抜群で、サッカー部でも期待の星らしい。ただ、あまり差をつけすぎないようにするために自分が所属する部活動の種類の競技には参加

できない取り決めになっており、故に彼はハンドボールに参加していた。

「まずは準備体操だ。そして続いてドリブル、パスの練習。その後二つのチームに分かれてミニゲームだ。他に意見のあるやついるか？」

坂田はてきぱきと皆をまとめ、そして練習を始めた。

「おお、がんばってんじやん」

今授業がなく、空きの間だった慎は自分のクラスの練習の様子をひよっこり見に来ていた。「ほうほう、なかなかだなあ」と見物していると、「ええ。がんばってますね」とそこへ姫川がやってくる。

「ただ、やっぱり一年生は体がまだまだできていませんし、経験も少ないです。反対に三年生は受験対策で体のなまっっている人が多くいます。やはり有利なのは二年生でしょう」

姫川のこの言葉に何か含みを感じた慎は「へえ、じゃあ優勝はどこだと思います？」とかまをかけた。すると姫川は何も隠すこともないといった顔立ちで「それは勿論私のクラスでしょう」と胸を張った。

「そんなのわかりませんよ。うちのクラスってことも、十分ありえますよ」

「確かに彼らはがんばっているから、ないとは言えません。ですがうちのクラスもそれ以上にがんばっていますよ」

二人は目を合わせ、火花を散らせる。そんな二人のほうにパスがそれたために泥にまみれたボールが飛んでいく。

「あ、危ない」

生徒の一人が叫ぶがもう遅かった。彼の声を聞いた二人はボールのほうへ振り向くがしかし、その瞬間に慎の顔面にボールがもうぶつかっていた。

「ぐへ」

慎は「いてて」と顔面を押える。そんな彼を見かねて姫川は「しょうがないですねえ」と肩をすくめた。

「私は慎先生を保健室に連れて行くから、お前たち怪我に気をつけて練習を続けるんだぞ」

姫川は大声で指示を出す。慎は「へっにはいひようふでふよ。こんふらいのへは、なれっほでふし」と自身は平気であることをアピールしたが、「唇から血をだらだら流している

人のいうことは聞けません」と無理やり連れて行かれてしまった。

「大丈夫かな、慎先生」

「大丈夫でしょ、あんくらいの傷」

淳は慎を心配したが、しかし雄二はすぐに気持ちを切り替えて練習に戻る。淳も雄二の言葉を思い返し、「大丈夫だよね。あれくらいの傷」と練習に戻るのだった。